

『不可能を可能に』

千葉県

中西養心館

小学6年 古 滝 裕太郎

この夏、ぼくの心を動かす大切な出会いがあった。一冊の本と、隻腕での稽古を続けておられる小森先生との出会いだった。隻腕とは、片方の腕を失った状態の事を言う。

小学校最後の夏休みに入り、ぼくは、読書感想文の本を探しに本屋へ出かけた。すぐ目にとまったのは「不可能とは可能性だ」この本は、三歳の時に事故で左手を失ったクロスカントリースキーの新田佳弘選手の半生が書かれた本だった。バンクーバーオリンピックで二つの金メダルを獲得している。

その時、少し前に、僕の通う中西養心館に上段の稽古を受けたいとの事で、奥様の運転で一時間以上もかけ稽古に来られた小森先生の事が、ふと頭に浮かんだ。ご自身の研究開発中の機械に右手を巻き込まれ、肱から下を失い、片方の左手だけで、稽古をされていた先生の事を思い出した。あの日、道場での稽古が終わった帰り道、お母さんと、ひとしきり小森先生の話が続いた。言われなければ隻腕なんて気づかなかったかもしれないくらい力強かった。五体満足という事が、いつもは当たり前で考える事すらなかったのに、ぼくの心は「ざわざわ」とした。そんな思いも、いつしか消えてしまっていたけれど、再び小森先生と稽古が出来るチャンスが来たんだ。

小森先生に利き腕を失ってからの剣道の事について話を聞いてみたくなった。そして出来ればもう一度、稽古をしてもらえないかとも思った。ぼくの勝手な思いに、お母さんはすぐに館長先生に相談してくれた。もしかしたら気を悪くされるかもしれない、という心配も吹き飛んだ。小森先生は快く引き受けて下さった。

それから、ぼくの質問を送って、すぐに先生から返事が届いた。利き腕を失った先生自身が書かれた何枚もの手紙を見て驚いた。剣道だけでなく文字を書く事も克服されていたんだ。ケガをした時には「もう剣道は出来ないだろう・・・」と思った事、入院中に剣道の後輩が「すぐに左手をきたえろ」と言って剣玉を買ってきてくれ、感激し、その日から剣玉による左手の訓練を行った事、剣道は片手でも健常者と対等に張り合える事がわかってきて「剣道をやっている本当に良かった」と思った事、ケガをされてから会社の剣道部や700人以上の子供達との稽古の中で短い竹刀を振ることすら大変だった時期を乗り越え、三尺八寸の竹刀を使用出来るようにまでなった事、隻腕での剣道を再開され二十年目で五段取得、平成二十四年には七段を取得されている。これまでの小森先生の努力の積み重ねは、僕の想像をはるかに超えていた。さらに、七十歳を過ぎ、左片手上段を高めようと現在も努力を続けておられる先生の姿勢に、とても感動した。

ぼくは、強くなりたい、勝ちたいと思って剣道が続けてきた。特に試合の前や試合で負

けた時には強く思ったけれど、お母さんからは「お前の勝ちたいという気持ちは薄っぺらい」と、いつも言われた。「そんな事はない」と言い返していたけれど、その通りだった。言葉ではいくらでも言える。その為に、具体的な、努力の積み重ねなど何もなかった。

小森先生との出会いは、そんな僕の「何とかなるさ」の心を動かした。それから、手紙の中には、たくさんの人への「感謝」という言葉があふれていた。とても印象的だった。

僕が、強い相手に勝つ為には、まずは、自分自身に克たなくてはいけないと思った。

目標を持ち、やるべき事を後回しにしない事。今やるべき事を、毎日少しずつでも積み重ねた時、いつか、勝てる剣道に変わっていきける。

道場では中西先生との剣道ノートに、これまで何度となく書かれてきた事がある。

卒業までに少しでも克服したい。僕が剣道を始めて約7年間、ご指導いただいている先生方や家族に支えられて今がある。僕を育てて下さった、たくさんの人達に感謝し、努力を積み重ね、弱い自分に克つ事に集中する。

新田佳弘選手、小森先生は、共に不可能を可能にした。

僕は、何だか夢をかなえる為に力がわいてきた。この夏の経験は勝ち負けではなく本当に強い選手になる為、そして誰からも応援される自分になる為の最高の夏になった。